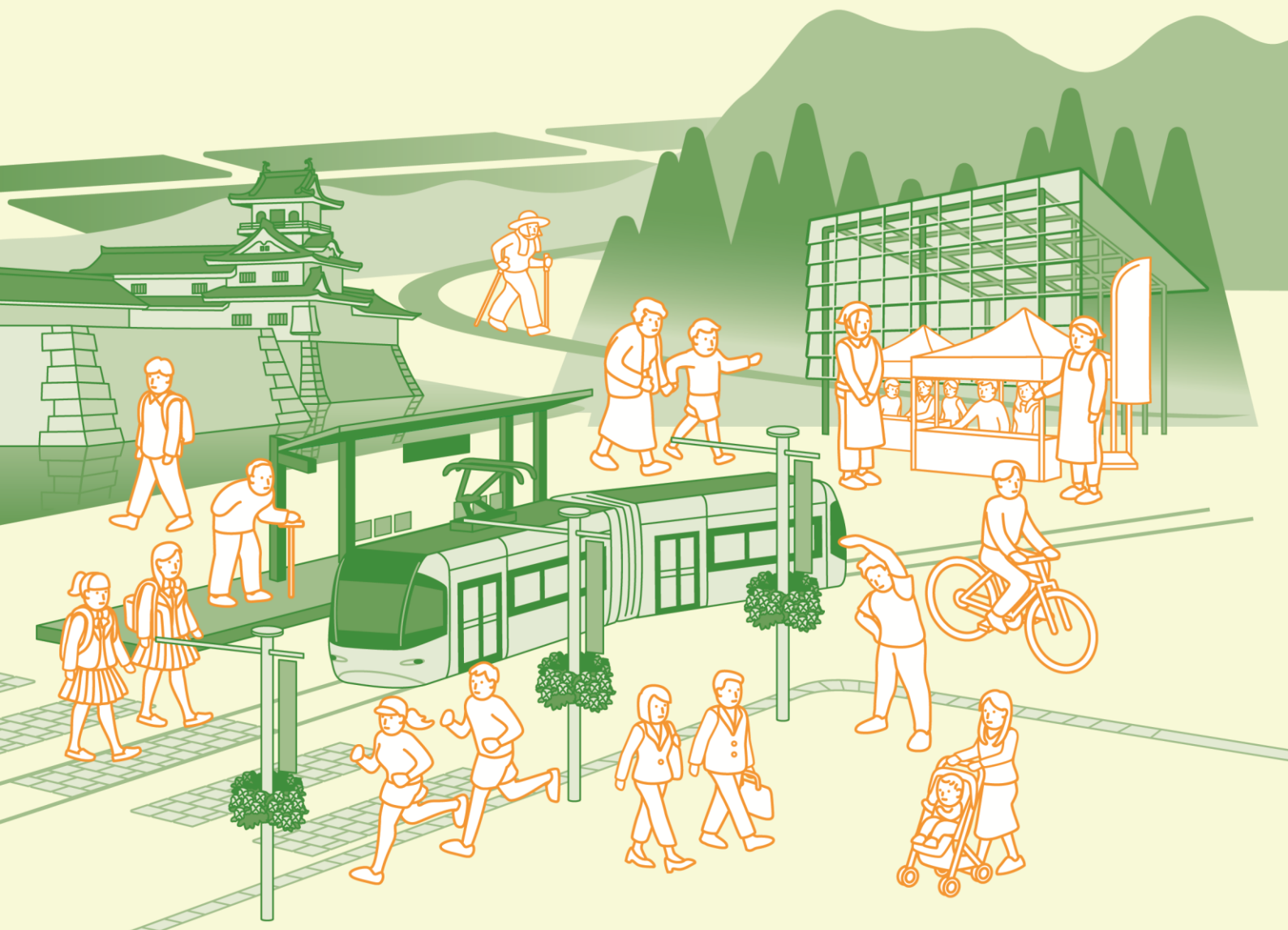


歩いて暮らせるコンパクトな まちづくりを目指して

高齢社会における交通と健康モニタリング調査

報告書

(2020 ~ 2024)



富山市

1. 調査の概要



1.1 調査の背景

富山市では、鉄軌道をはじめとする公共交通を活性化させ、その沿線に居住、商業、業務、文化等の都市の諸機能を集積させることにより、公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりの実現をめざしています。このため、福祉や医療、教育や文化、経済や雇用など、都市の総合力を高めるためにコンパクトシティ政策を柱として各種施策に取り組んでいます。

富山市が目指す「お団子と串の都市構造」

串：一定水準以上のサービスレベルの公共交通

お団子：串で結ばれた徒歩圏

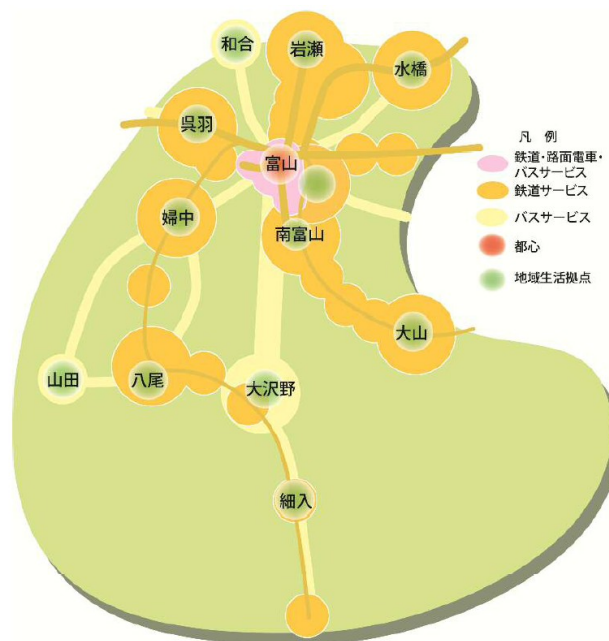
都心部だけではなく全市的に行うコンパクトなまちづくり

<コンパクトなまちづくり実現の3本柱>

- ①公共交通の活性化
- ②公共交通沿線地区への居住促進
- ③中心市街地の活性化

富山市の人口(令和2[2020]年国勢調査)

総人口	413,938人	100.0%
年少人口(15歳未満)	48,478人	11.7%
生産年齢人口(15歳以上65歳未満)	241,448人	58.3%
老年人口(65歳以上)	124,012人	30%



1.2 調査の目的

富山市は平成28年度から、国の「地方創生推進交付金」等を活用しながら、「高齢社会における交通と健康モニタリング調査」を実施しています。

この調査は、おでかけ定期券効果の把握、高齢者の外出支援、医療費の削減、コンパクトなまちづくりへの効果などを分析する第Ⅰ期調査と、「とほ活」アプリの機能を用いて、歩数や公共交通利用履歴といった交通行動や健康、日常生活に関するデータを調査する第Ⅱ期調査に分けて行われ、コンパクトシティ施策の効果検証及び新たな施策立案の基礎資料とすることを目的としています。

【本調査における主な取組】

- 中心市街地滞在状況調査
- 富山市民等交通と健康モニタリング調査
- 高齢者等の交通行動や移動経路、まちなかにおける滞在時間等の分析
- 歩数や公共交通の利用と健康や生活習慣、居住地域、心の満足度などの関連の調査分析
- 都市政策や交通政策、中心市街地活性化に資する施策検討・提言



1.3 調査の経緯

第 I 期調査

平成27年(2015年)

京都大学を中心としたコンソーシアムと、高齢者の外出機会の創出による健康寿命の延伸を目指して、高齢者健康増進端末機「おでかけっち」の研究開発を行いました。

平成28年(2016年)

高齢者(65歳以上)を対象に「おでかけっち」を使用したモニタリング調査を実施しました。
「おでかけ定期券」の所有者と非所有者を比較し、高齢者の交通行動や移動経路、滞在時間などを分析し、その効果を検証しました。

平成30年(2018年)

平成28年の調査対象者から選定し、パネル調査(調査対象者を固定[パネル化]し、一定期間に同じ調査を繰り返す手法)を実施しました。
また、中心商業地区における訪問者の行動分析を行うため、グランドプラザで「おでかけっち」を配布し、回遊状況进行分析しました。

令和元年(2019年)

富山駅周辺地区で2回目の回遊調査を実施しました。

おでかけ定期券

富山市内在住の65歳以上の方が市内各地から中心市街地に出かける際に、公共交通機関を1乗車100円で利用できるお得な定期券。



第 II 期調査

令和3年(2021年)

来街者に「とほ活」アプリをインストールして調査参加を促すイベントを開催し、同意者から取得した歩数・位置情報データや健康情報を分析しました。

令和4年(2022年)

平成28年度と平成30年度のパネル調査協力者のうち同意者に「とほ活」アプリをインストールした端末を配布し、「おでかけ定期券」所有・利用の有無による歩数の経年変化を分析しました。

令和6年(2024年)

「とほ活」アプリの機能を活用し、歩数や公共交通利用と健康指標、生活習慣、居住地域、心の満足度との関連を比較分析しました。

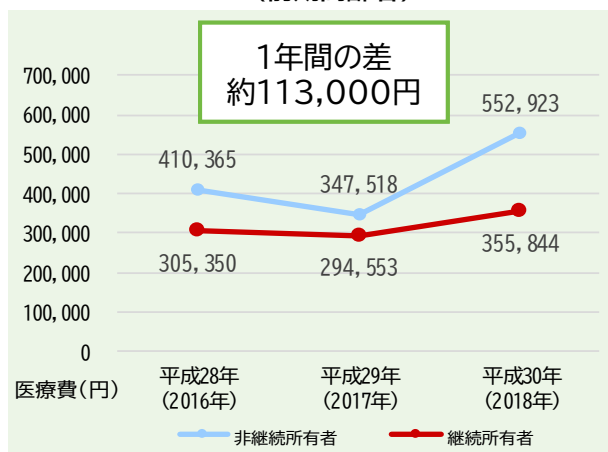
2. 第Ⅰ期調査の結果(抜粋)



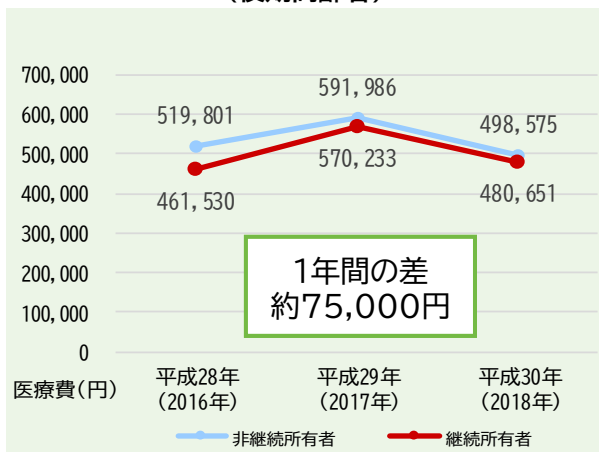
2.1 おでかけ定期券の所有状況と医療費

「おでかけ定期券を所有している人」は「おでかけ定期券を所有していない人」と比べ、1日の平均歩数が多く、中心市街地への来訪頻度が多く、滞在時間も長く、医療費が少ないことが分かりました。これより、おでかけ定期券に関するこれまでの取組みは、効果があると評価することができました。

「おでかけ定期券」の継続所有、非継続所有者の平均医療費の経年変化
(前期高齢者)



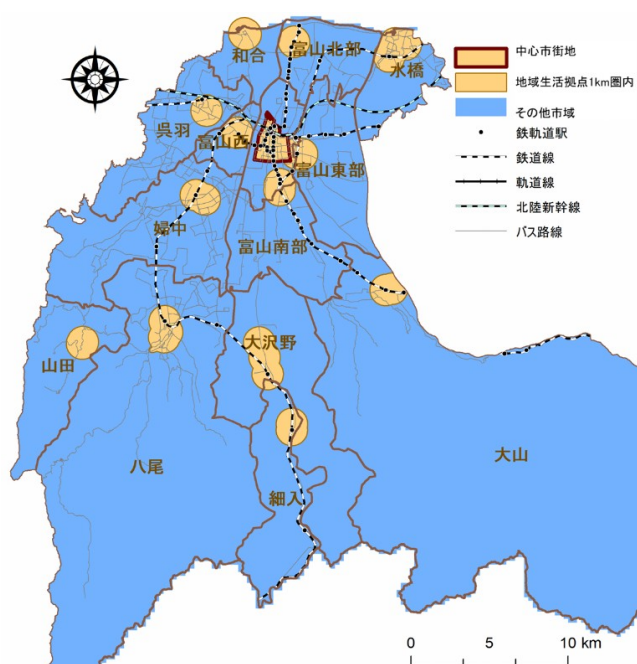
(後期高齢者)



2.2 居住地域と医療費の関係

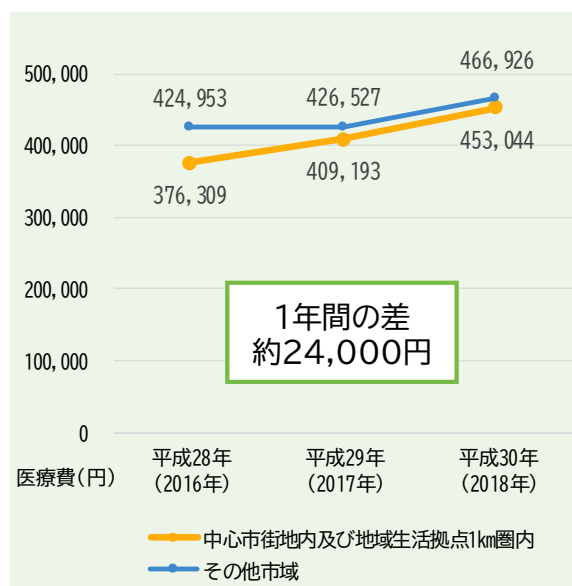
高齢者のパネル調査結果から、1日平均歩数の多い人ほど医療費が少ない傾向であることが分かりました。また、富山市の「お団子と串の都市構造」のお団子地区内に居住している人は、その他市域に居住している方よりも3年間の平均医療費が少なくなっています。

中心市街地内及び地域生活拠点1km圏内とその他市域



居住地域別の平成28[2016]～平成30[2018]年の平均医療費

(全高齢者、要支援・要介護認定なし、歩行補助なし)



2. 第 I 期調査の結果(抜粋)



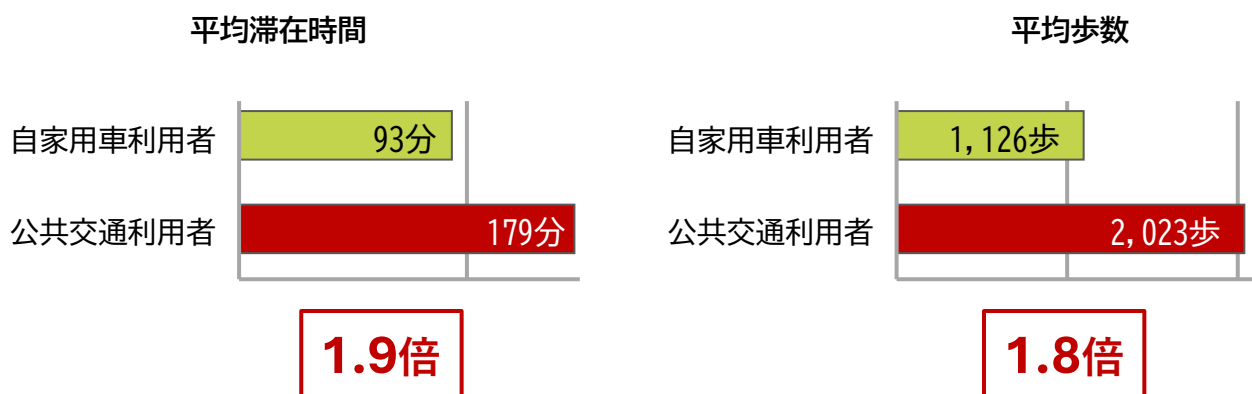
2.3 中心市街地の回遊行動に関する分析

中心市街地を訪問した人がどのような行動をしているか分析するため、おでかけっちを配布し、その行動状況を調査しました。

■ 中心商業地区(商店街エリア)

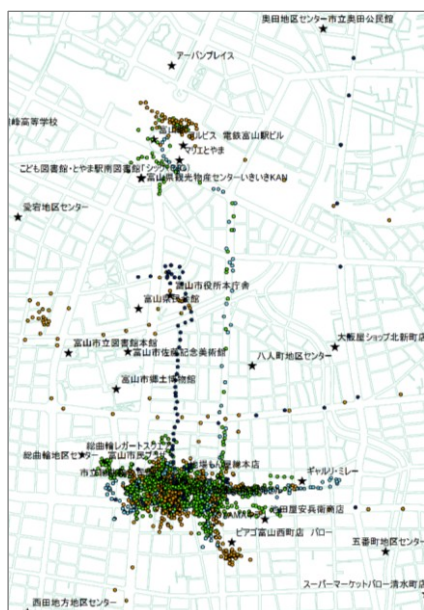
公共交通利用者は自家用車利用者と比べ平均滞在時間が1.9倍、歩数が1.8倍高いことが分かりました。

また、公共交通利用者は、総曲輪通りでの回遊に加え、富山駅周辺での回遊や特定の店舗への訪問など、広い範囲での回遊が確認できます。これに対し、自家用車利用者は、総曲輪通りを中心に回遊が集中しており、回遊の範囲が狭いことが分かります。

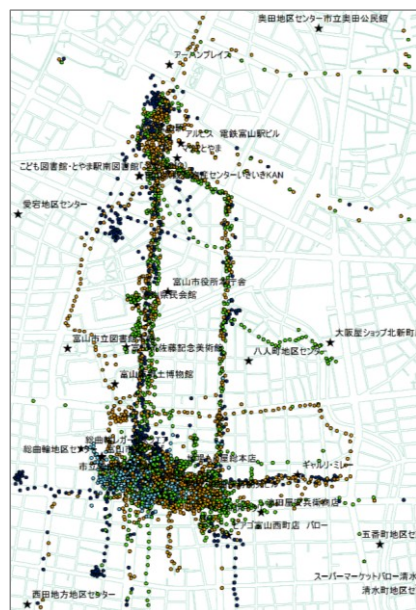


中心市街地の回遊状況

(自家用車利用者:112人)



(公共交通利用者:67人)



凡例 ●09:00-11:59 ●12:00-14:59 ●15:00-17:59 ●18:00-23:59

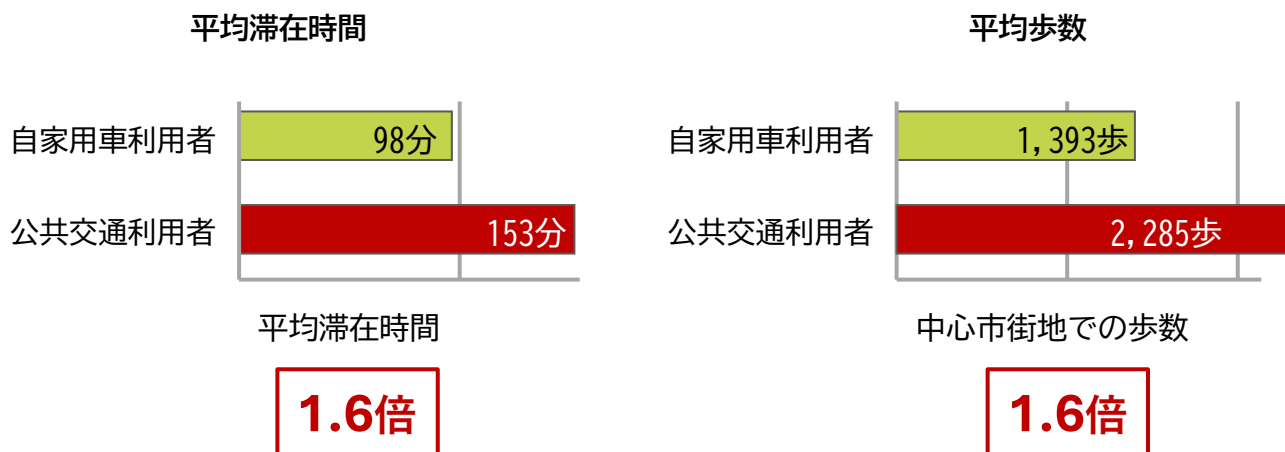
※調査用端末機「おでかけっち」で10秒毎に取得した位置情報データ(GPS)で観測した時間

2. 第 I 期調査の結果(抜粋)

■ 富山駅周辺地区

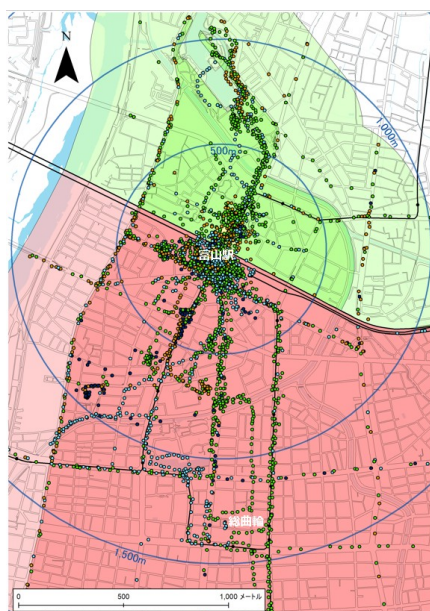
公共交通利用者は自家用車利用者と比べ平均滞在時間、歩数ともに1.6倍高いことが分かりました。

また、公共交通で来街した人は、自家用車で来街した人より、富山駅の南北をより広範囲に回遊しています。

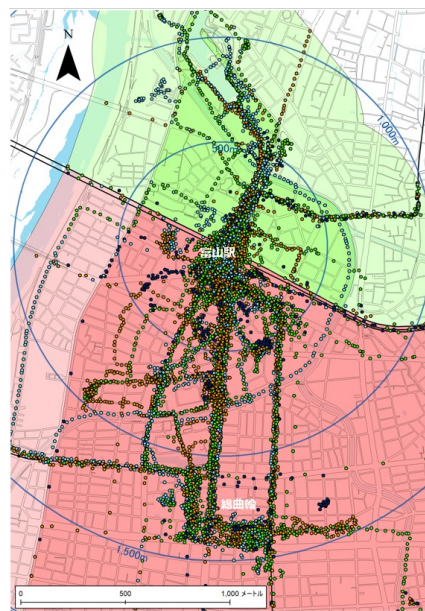


県内在住者の富山駅周辺地区の回遊状況

(自家用車利用者:57人)



(公共交通利用者:116人)



凡例 ● 09:00-11:59 ● 12:00-14:59 ● 15:00-17:59 ● 18:00-23:59

※調査用端末機「おでかけっち」で10秒毎に取得した位置情報データ(GPS)で観測した時間

第 I 期調査の詳細はこちら

<https://tohokatsu.city.toyama.lg.jp/research/#method1>



3. 第Ⅱ期調査



3.1 富山市民 交通と健康モニタリング調査

■ 調査の目的と調査方法

富山市が進めてきた公共交通の活性化をはじめとするコンパクトシティ施策の効果検証及び新たな施策立案の基礎資料とするため、「とほ活」アプリを活用し、市民の歩数や公共交通利用履歴といった交通行動と健康に関するデータを調査し、相関関係を分析しました。

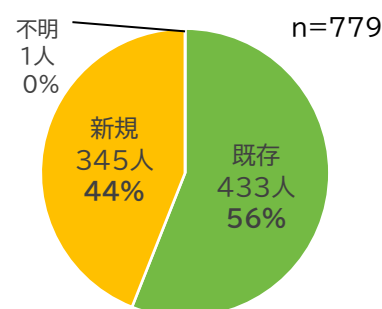
調査参加者は、モニター募集イベントの開催、市民や企業の協力により 779 人(モニター募集イベントの参加者430人、その他一般市民、協力企業より349人)となりました。

<調査参加者数>

全体参加者人数	779人
モニター募集イベントの参加者数(5日間)	430人
その他協力者(一般市民、協力企業)	349人



<調査参加者数の内訳>



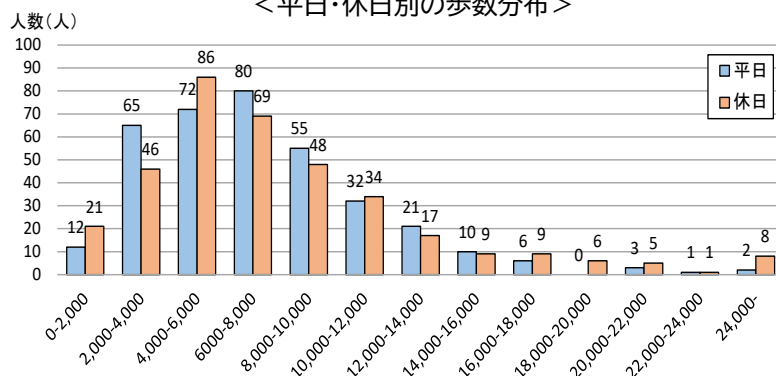
■ 歩数データの分析

「とほ活」アプリより取得した歩数データを平日・休日別に集計・整理し、比較しました。

平日は 6,000～8,000 歩未満をピークに 2,000～8,000 歩に集中していました。

休日は 4,000～6,000 歩未満にピークがありましたが、平日よりも一方で16,000 歩以上の人も多くなっていました。

<平日・休日別の歩数分布>



【平日】

平均値:7,386歩

中央値:6,657歩

【休日】

平均値:8,056歩

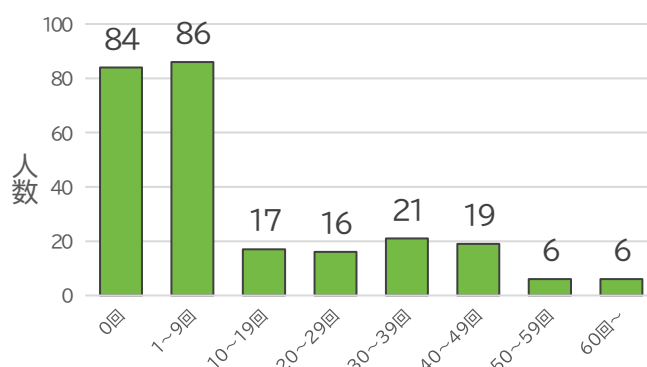
中央値:6,592歩

■ ICカードデータの分析

IC カード(ecomyca, Passca, おでかけ定期券)の情報提供に同意頂いた255人を対象に、調査期間中の45日間にどの交通手段を何回利用したかを集計しました。

IC カードの利用は 1～9 回利用が最も多く、次いで 30～39 回利用が多く、時々利用する人と、定期券などにより定期的な利用をする人に分かれていることが分かりました。

<ICカードの利用回数>





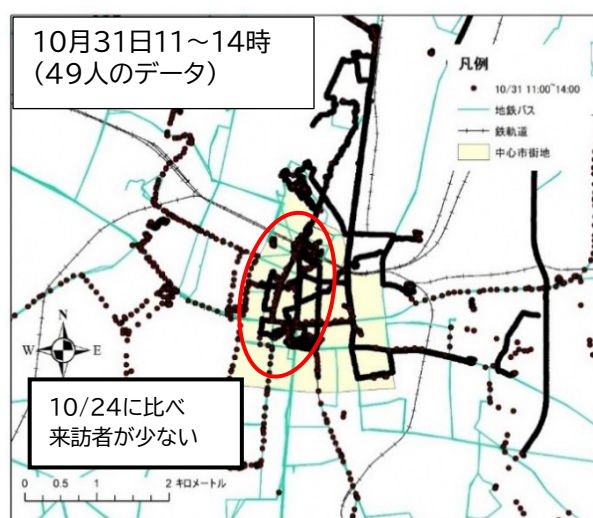
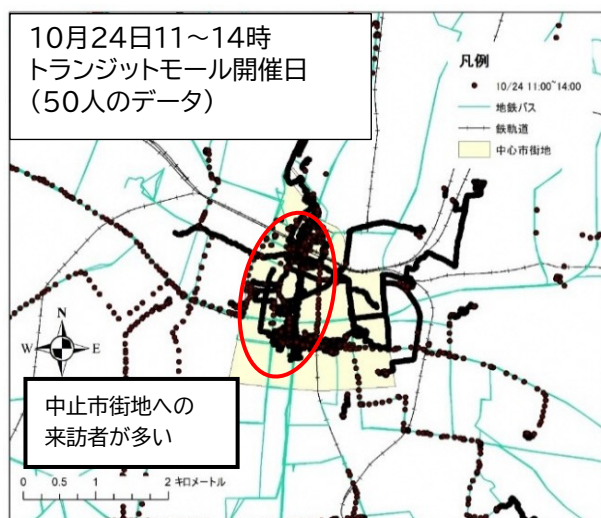
■ GPSデータの分析

中心市街地への来訪状況を調査するため、トランジットモールが開催された 2021年10月24日と2021年10月31日との違いを分析しました。

観測日	外出者数①	中心市街地へ 来訪者数②	中心市街地へ の来訪割合 ③=②/①	天気
10月24日(日) トランジットモール	50人	34人	68.0%	晴
10月31日(日)	49人	23人	46.9%	曇/晴

当日の昼間時間帯 11時～14時に外出した人のうち、中心市街地に来た人の割合を後の日曜日と比較すると、10月24日は中心市街地に出ている割合が 68.0%と多くなっていました。

中心市街地への来訪状況

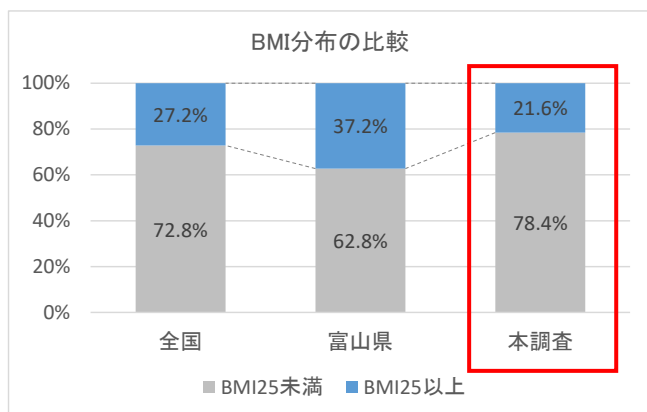


■ 健康指標の分析(全国および富山県との比較)

アンケート調査によりBMI指数の算出やメタボ判定を行い、全国(国民健康・栄養調査(2019))、富山県(県民健康栄養調査)の結果と比較しました。

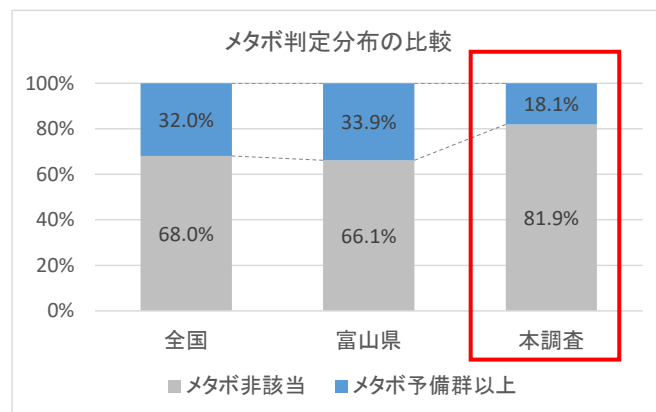
①BMI指数

全国および富山県よりも普通(18.5以上25未満)が多く、肥満(25以上)が少ないことが分かりました。



②メタボ判定

全国および富山県よりも非該当が多く、予備群該当、基準該当が少ないことが分かりました。

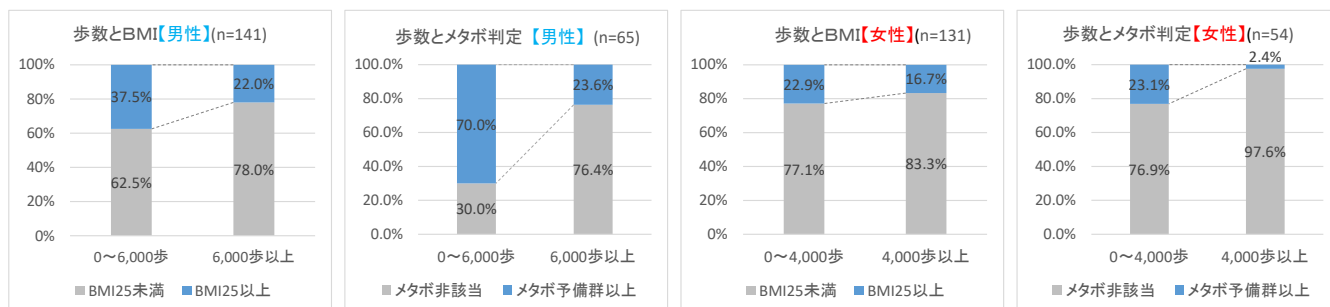


調査参加者は「とほ活」に興味を持つなど、比較的健康に留意している人が多いことが推測されます。



■ 交通・歩数・健康・生活習慣の関係性の分析

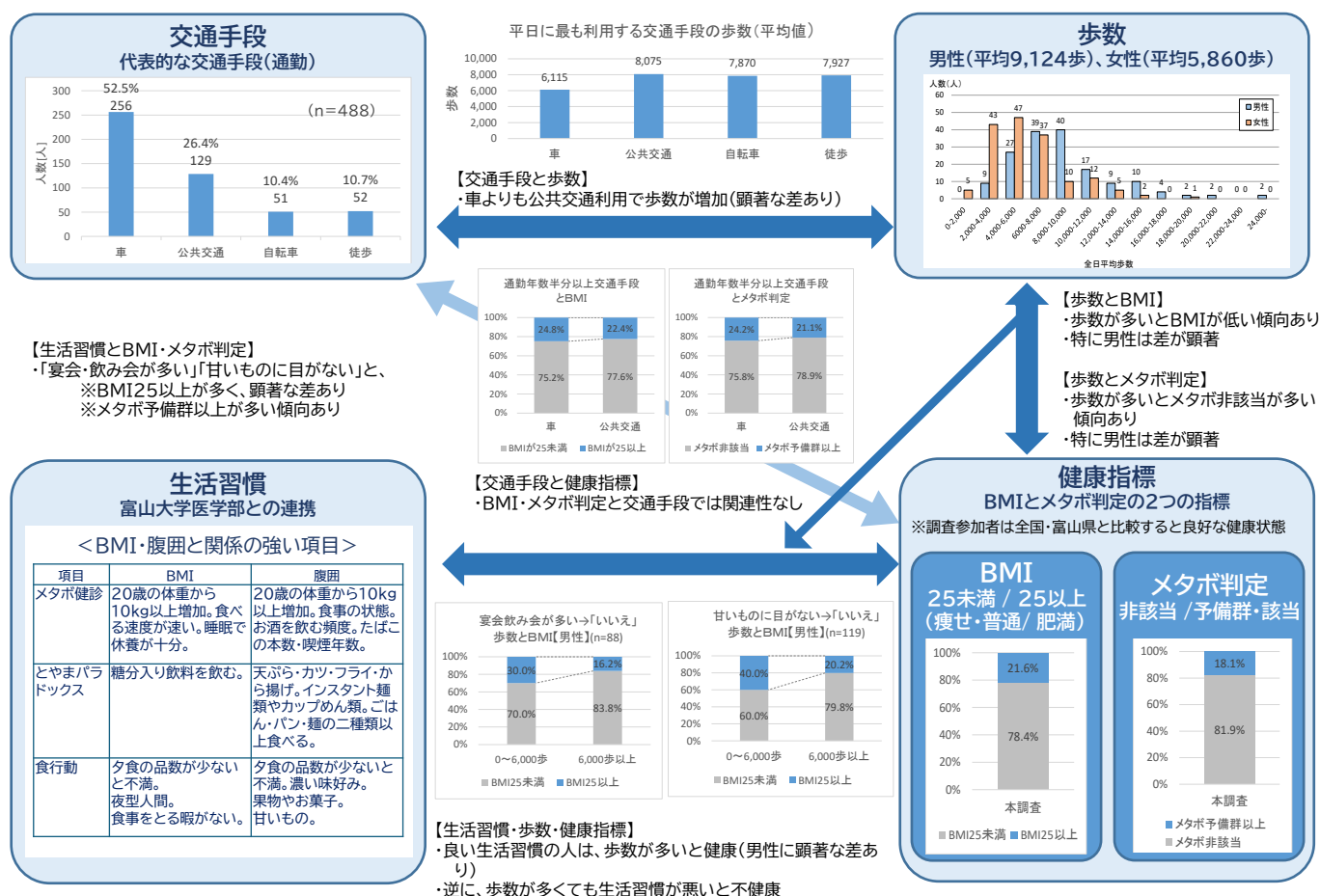
交通手段と歩数、交通手段と健康指標、歩数と健康指標、生活習慣による健康への影響、さらに生活習慣を踏まえた歩数と健康指標の関係についての分析を行いました。(アンケート調査結果と歩数による分析)



【分析結果のまとめ】

車よりも公共交通を利用すれば歩数は増加し、歩数が多ければ BMI やメタボ判定等の健康指標も良くなる傾向があります。

ただし、歩数が多くても生活習慣が悪いと健康指標は良くならないこともわかりました。





3.2 高齢者交通行動調査【パネル調査】(第Ⅱ期)

■ 調査の目的

高齢者の歩行量や医療費等における時系列分析を行うため、高齢者行動調査として平成 28[2016] 年、平成30[2018]年に続く、パネル調査を実施しました。

※令和4年度は、「とほ活」アプリの機能を活用し、市民の歩数や公共交通利用履歴といった交通行動と健康に関するデータも調査し分析しました。

■ 調査対象者

平成30[2018]年度の高齢者行動調査協力者459人(端末調査協力者 355人+医療費データのみ提供者 104人)を対象とした(死亡 施設入居者等は除く)。

<調査対象者数および有効サンプル数>

種類	依頼対象	調査対象	有効サンプル
端末調査協力者	355人	197人	169人
医療費提供者	459人	283人	261人

■ 調査方法と調査期間

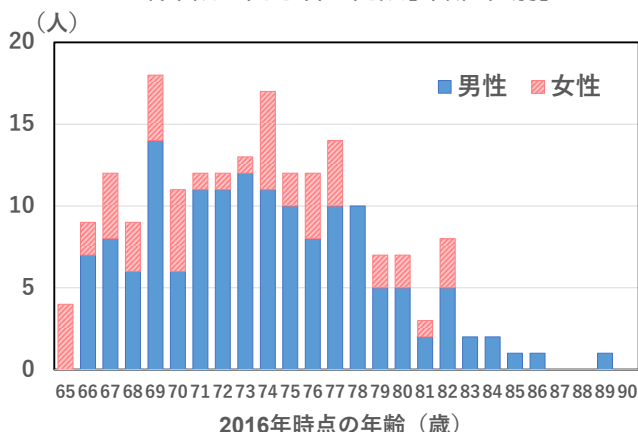
【調査方法】

端末調査協力者に調査用「とほ活アプリ」インストール済みのスマートフォンを配布。医療費データは平成 27[2015]年～令和 3[2021]年のデータを分析対象としました。

【端末機使用の調査期間】

令和4年9月30日(金)から10月14日(金)の15日間。

<端末調査同意者の内訳【年齢・性別】>



歩行量データの分析

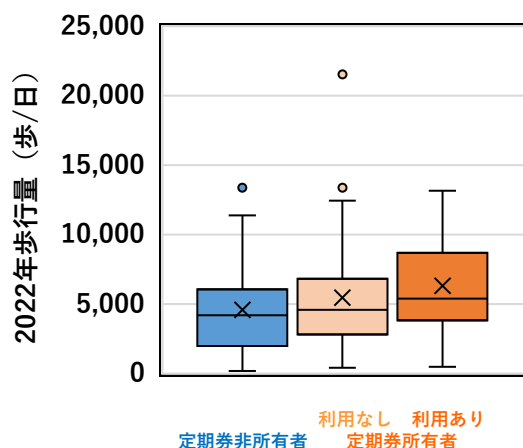
有効サンプル 169人の平均歩行量は 5,185 歩/日でした。

	外出日の歩数	外出頻度	歩行量
対象者数	169	169	169
平均	5,865	0.85	5,185

■ おでかけ定期利用と歩行量

おでかけ定期の利用回数と歩行量の関係を見ると、「定期券利用あり」は、「定期券非所有者」、「定期券所有しているが利用なし」と比べ、平均歩行量が多くなっています。

<おでかけ定期券の所有・利用で分類した歩行量の分布>





定期券の所有有無にかかわらず、調査期間中の定期券利用のあり／なしに分類し、その平均値を比較しました。この結果、統計的にみても「定期券利用のある人は、歩行量が多い。」と証明される結果となりました。(Welch のt検定において 10%有意)

<おでかけ定期券利用有無で分類した歩数の分布>

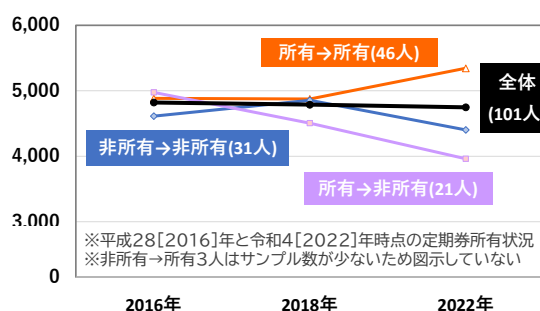
	利用なし			定期券所有 利用あり
	定期券 非所有	定期券所有 利用なし	計	
対象者数	84	54	138	31
平均	4,188	5,464	4,931	6,318

歩行量の経年変化の分析

■ おでかけ定期券の所有状況による経年変化

全体でみると徐々に歩行量が減少する傾向のなかで、定期券を所有し続けている人の歩行量は減少しませんが、定期券が所有から非所有に変化した人や非所有の人の歩行量は、減少する傾向が見られました。

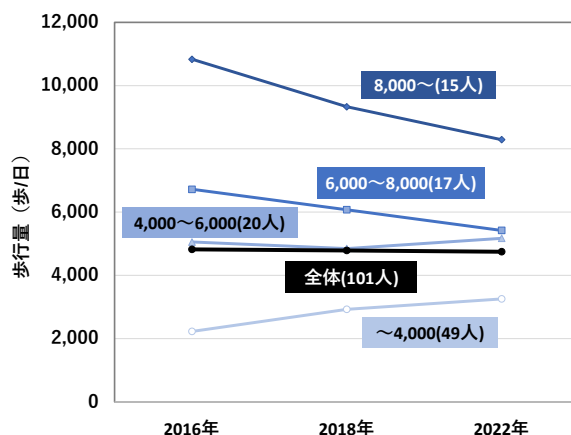
<定期券所有状況別にみた歩行量の経年変化>



■ 歩行量分類別の歩行量の経年変化

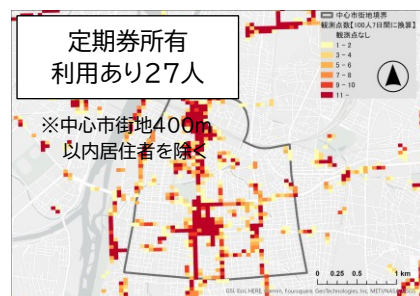
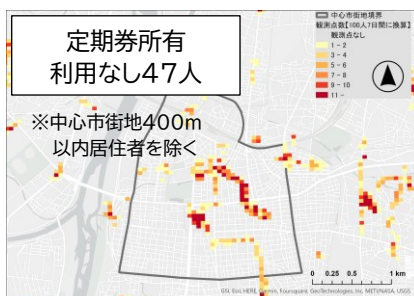
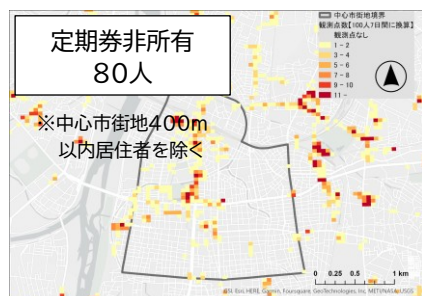
平成 28[2016]年時点の歩行量で分類すると、6,000 歩以上は減少傾向にあります。全体として歩行量が多ければ、4 年、6 年と経過しても歩行量が多いことが分かりました。

<平成28[2016]年歩行量で分類した歩行量の経年変化>



GPSデータの分析

中心市街地周辺の徒歩移動計測点をみると、定期券利用ありの人は、富山駅やグランドプラザ周辺を歩いている回数が多いという結果がでました。



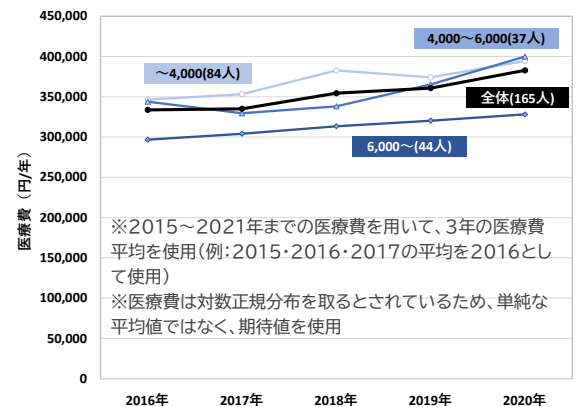


医療費の経年変化の分析

歩行量分類別の医療費の経年変化

平成 28[2016]年時点の歩行量で分類すると、6,000 歩以上の分類が2020年まで継続して最も低い医療費となっています。4,000 歩～6,000 歩の分類の医療費は 2020年に 4,000 歩未満の分類よりも高くなっていますが、それまでは 4,000 歩未満が最も高い医療費で推移しています。

<平成28[2016]年歩行量で分類した医療費の経年変化>

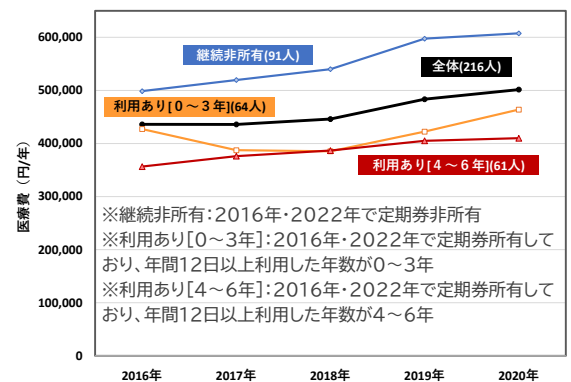


おでかけ定期券の所有状況による経年変化

おでかけ定期券の所有・利用状況で分類した医療費の経年変化をみると、継続した定期券非所有の人の医療費の増加傾向が顕著でした。

定期券所有が続いている人の医療費は、増加傾向にあるものの非所有の人と比較すれば、緩やかな増加であり、定期券を利用して公共交通を利用することは健康にも寄与しているものと推察されます。

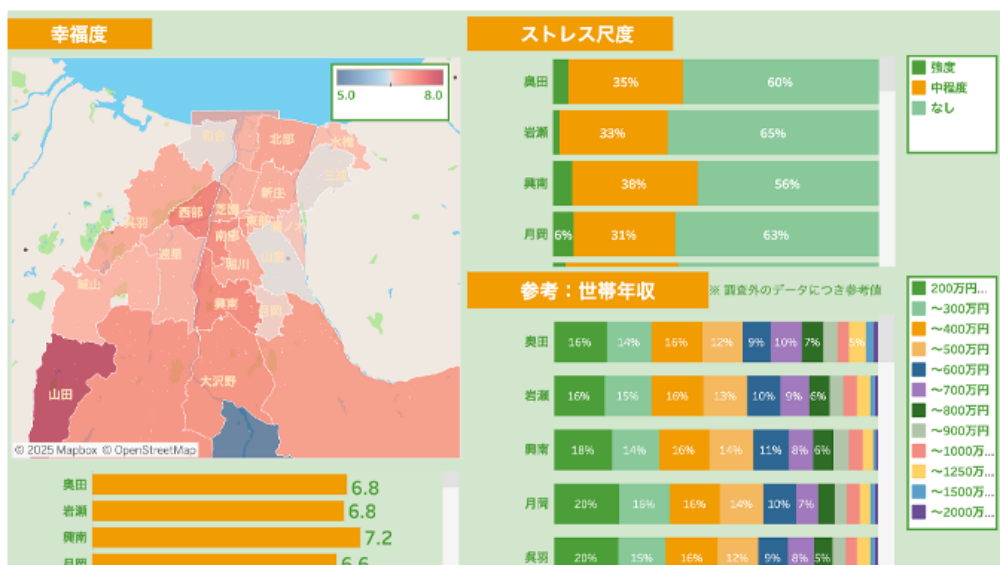
<おでかけ定期券所有状況で分類した医療費の経年変化>



3.3 居住区域と社会関連資本指標・健康・幸福度の調査

調査の目的

とほ活アプリを活用して歩数などの交通行動指標と身長・体重などの健康指標や社会関連資本指標のデータの「見える化」を行い、交通と健康の相関関係に加え、富山市のまちなか及び中心市街地の居住環境と富山市民の健康度・幸福度との関連を分析しました。





■ 調査対象者と有効回答率

富山市民を対象に、とほ活アプリを通じたお知らせ、モニター募集イベントや一般社団法人トヤマチミライ が主催するあおぞら会議を通じ 1,856人にご協力をいただき、有効回答率は95.5%(1,772人)となりました。

	n	%
富山市内に住所アリ	1,772	95.5%
富山市外	43	2.3%
無効郵便番号	41	2.2%
全回答者	1,856	100%

■ 調査方法と調査期間

【調査方法】

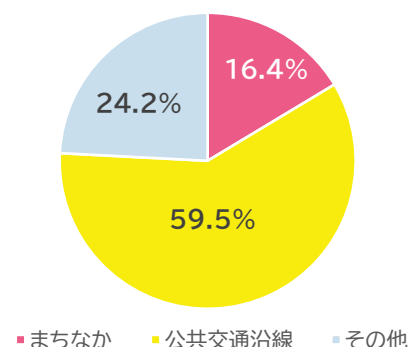
とほ活アプリにアンケートフォームを設置し、既存・新規ユーザーのいずれに対しても調査参加を勧奨しました。調査参加者のアンケート回答及び とほ活アプリから得られた歩数データと公共交通機関利用状況(10月の1か月間分)から、居住地情報と歩数及び健康指標との関連を多変量解析にて統計的に検討しました。

【調査期間】

アンケート回答期間: 令和6年9月1日(日)～9月30日(月)

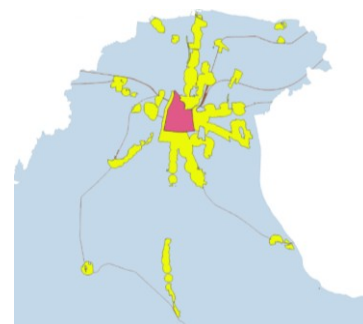
歩数等の情報収集期間: 令和6年10月1日(火)～10月31日(木)

調査対象者1,772名の内訳



■ 分析対象区域

富山市の立地適正化計画に基づき、分析対象の区域を「都心地区(まちなか)」「(以下「まちなか」とする)、公共交通沿線居住推進地区(以下「公共交通沿線」とする)、「その他」で分類し、対象者から郵便番号を回答してもらい、どの地区に居住するか判定しました(まちなかと公共交通沿線の両方と重複する地区はまちなかと判定しました)。



■ Walkscore の分析

Walkscore(ウォークスコア)とは、任意の住所の歩いて生活することの利便性(ウォーカビリティ)を表す学術的にも使用される指標です。

ウォーカビリティが高い地域では実際に日常的な歩数が増えることで身体活動量が高まることや、BMIが低く肥満が少ないことやウェルビーイングが高いということを示した先行研究があります。

調査回答者の居住街区のWalkscoreを各地区別に平均値を算出し比較したところ、まちなかが最も高く、続いて、公共交通沿線、その他の順となりました。また、まちなかや、公共交通沿線は富山市の全体平均よりも高いことが分かりました。

	その他	公共交通沿線	まちなか	全体
郵便番号街区数	184	210	60	454
Walkscores平均値 (SD)	36.2 (21.1)	66.8 (19.1)	94.1 (6.4)	58.0 (27.5)

まちなかや公共交通沿線は公共交通機関の利便性が高く、食料品店などの日常生活に必要な商業施設や公共施設などが充実しているため、歩きやすく、生活しやすい環境であることが分かります。

富山市のコンパクトシティ政策によるまちづくりは、Walkscoreにも表れているといえます。

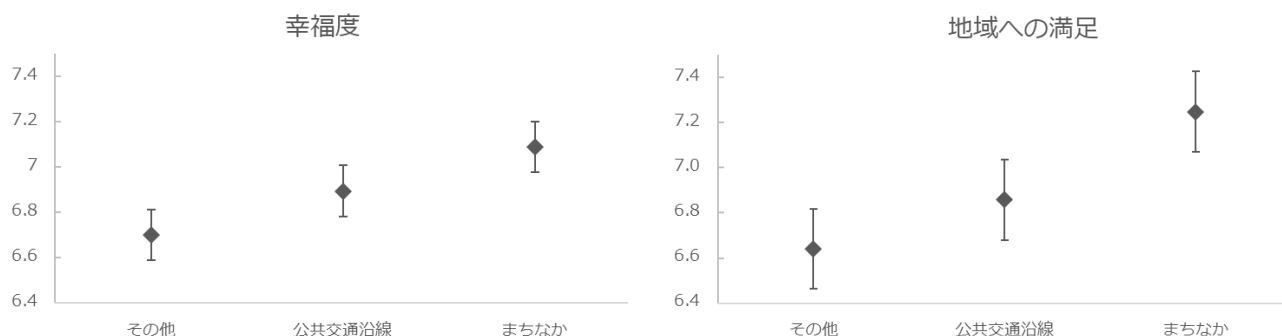


幸福度の分析

■ ウェルビーイング調査(地区別)

デジタル庁が開発したウェルビーイング指標の「幸福度」、「地域への満足度」をアンケート調査により計測し、地域ごとに比較分析しました。

その結果、幸福度、地域への満足度ともに、まちなかが最も高く、続いて、公共交通沿線、その他となりました。



一方で、精神的ストレスや睡眠時間、ヘルスリテラシーは地域差がなく、ウェルビーイングとの関連も見られませんでした。

また、デジタル庁による令和6年度の全国Well-Being調査結果によると、富山県全域の幸福度の平均値は6.2、地域への満足度の平均値は6.0でした。

「とほ活」アプリの利用者は富山県平均よりどちらも高く、アプリの利用が歩く意識の向上や外出のきっかけとなり、ウェルビーイングを引き上げている可能性も推測されます。

	その他	公共交通沿線	まちなか
ストレス(0-24点)	3.5	4	3.8
睡眠時間(分)	385	386	385
ヘルスリテラシー(0-5点)	3.7	3.6	3.7

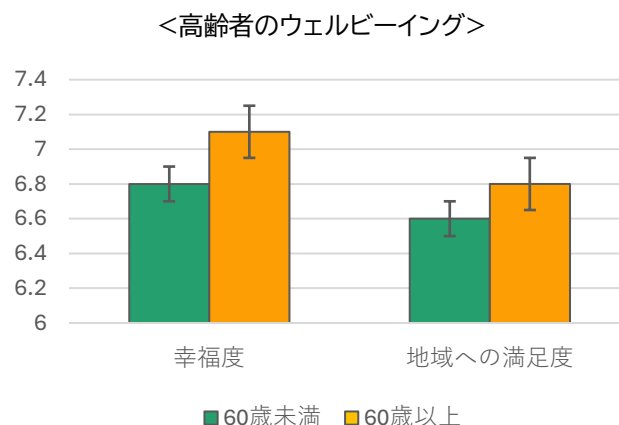
<本調査と富山県のウェルビーイング指標の比較>

	本調査結果			富山県
	まちなか	公共交通沿線	その他	
幸福度	7.1	6.9	6.7	6.2
地域への満足	7.1	6.7	6.4	6.0

■ ウェルビーイング(高齢者)

60歳以上と未満でウェルビーイングを比較すると、幸福度は60歳以上の方が有意に高いという結果が得られました。

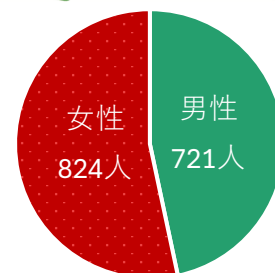
一般に身体的健康度指標は年齢上昇とともに低下するのに対して、精神的健康度指標(ウェルビーイング)は年齢上昇とともに上昇するのが特徴ですが、富山市においては、おでかけ定期券による外出機会の創出が精神的健康度を高める影響を与えている可能性も推察されます。





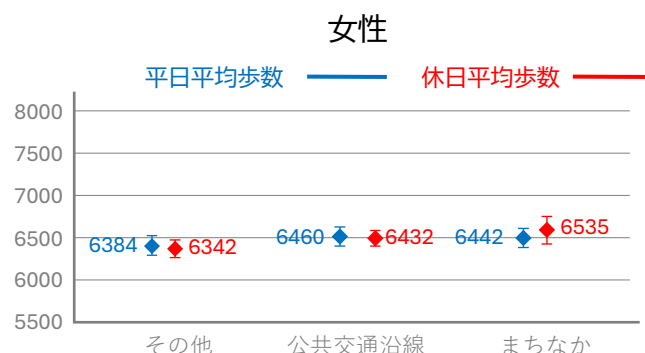
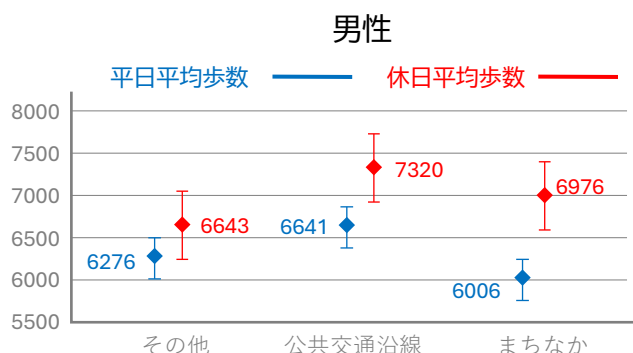
歩数の状況

「とほ活」アプリから令和6年10月1日(火)～10月31日(木)の歩数データを収集し、性別の登録があった1,545名で男女別に集計を行いました。



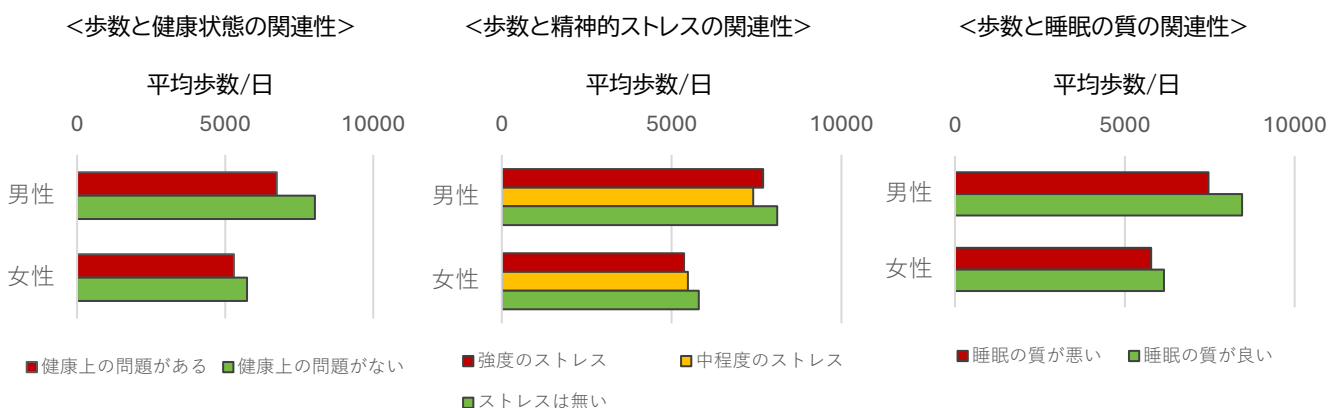
歩数と居住地における関連性

男性は平日、公共交通沿線の歩数がまちなかやその他より多く、休日はすべての地域で平日より歩数が増加しました。その結果、公共交通沿線とまちなかの有意差はなくなり、まちなかとその他、公共交通沿線とその他の差が有意となりました。なお、休日に最も歩数が伸びたのは まちなかとなっています。一方で、女性は平日と休日の歩数に差はなく、居住地間の差もありませんでした。



歩数と健康指標における関連性

アンケートにより、健康状態や精神的ストレス、睡眠の質に関する調査を行い、それぞれの結果と歩数との関連性を分析しました。



健康状態に問題がある人は、問題がない人と比較し、1日の平均歩数が少ないことがわかりました。ストレスや睡眠の質についても、平均歩数が多い群と少ない群に分けて比較すると平均歩数が多い人ほどストレスをあまり感じておらず、睡眠の質が良いことがわかりました。男性において各群の平均値に有意な差が見られました。

歩数と居住地や健康指標との関連性において、男性は有意差がありましたが、女性は有意差がありませんでした。今回の調査では、その因果関係を結論付けることができないため、要因の追及が今後の課題として残りました。

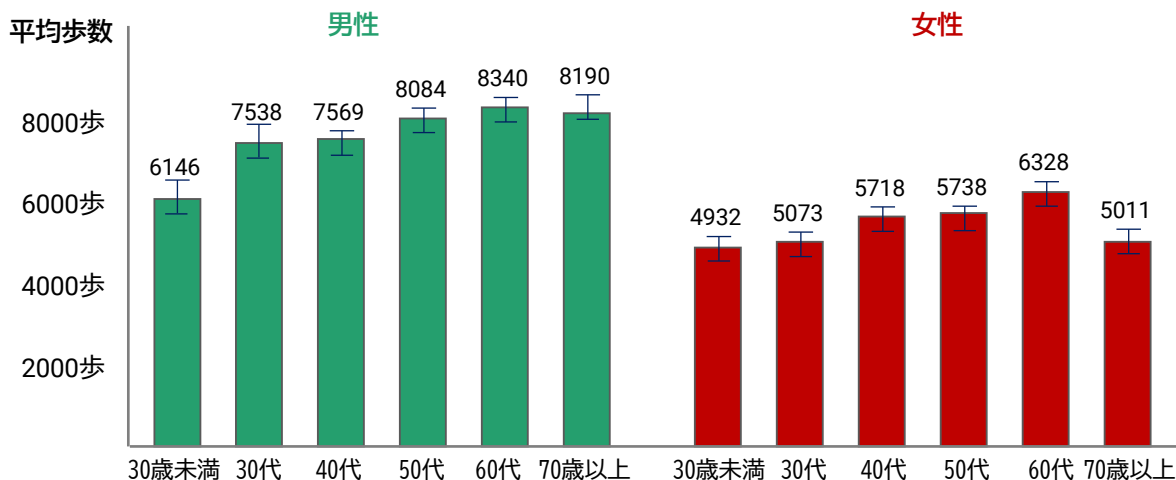


■ 年代別の平均歩数

「とほ活」アプリで収集した歩数データより、1日の平均歩数を年齢別で算出し、比較しました。

男性も女性も60歳代の平均歩数が最多となりました。男性は30歳未満が有意に少なく、そのほかの年代では有意差がありませんでした。

ウェルビーイング指標同様、おでかけ定期券による外出機会の創出が歩数の増加に影響を与えている可能性が推察されます。

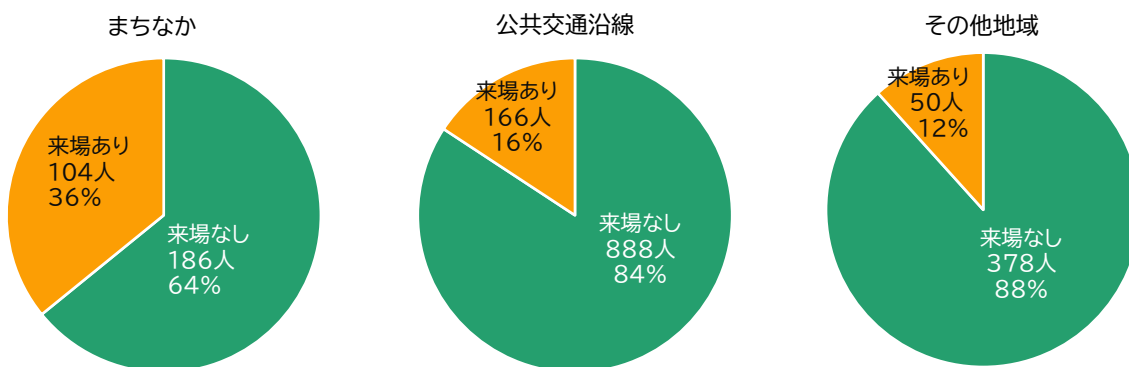


■ イベント参加状況

対象者1,772名のうち、320名(18.1%)が、「とほ活」アプリが指定するイベントに会場しQRコードを取得していました。

QRコードの取得率を地域別で比較すると、イベントの開催場所に関係なく、まちなかが最も多く、次に公共交通沿線、その他の順となりました。また男女における差はありませんでした。

<QRコード取得状況>



イベントは中心市街地で開催されることが多いため、まちなか居住者はイベント会場へのアクセスの良さが参加率の高さにつながり、ひいては歩数の増加、ウェルビーイング指標の向上に寄与している可能性も推察されます。

また郊外でのイベントにおいてもまちなか居住者の参加率が最も高いことから、日常の外出意欲が高いことが考えられます。

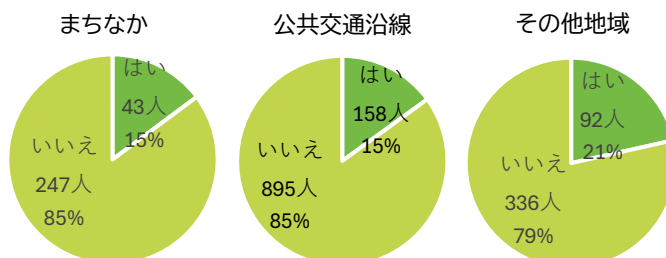


■ 社会関連指標の分析

アンケートにより、居住環境や生活環境などの社会関連指標の調査を行い、各地域において比較分析をしました。

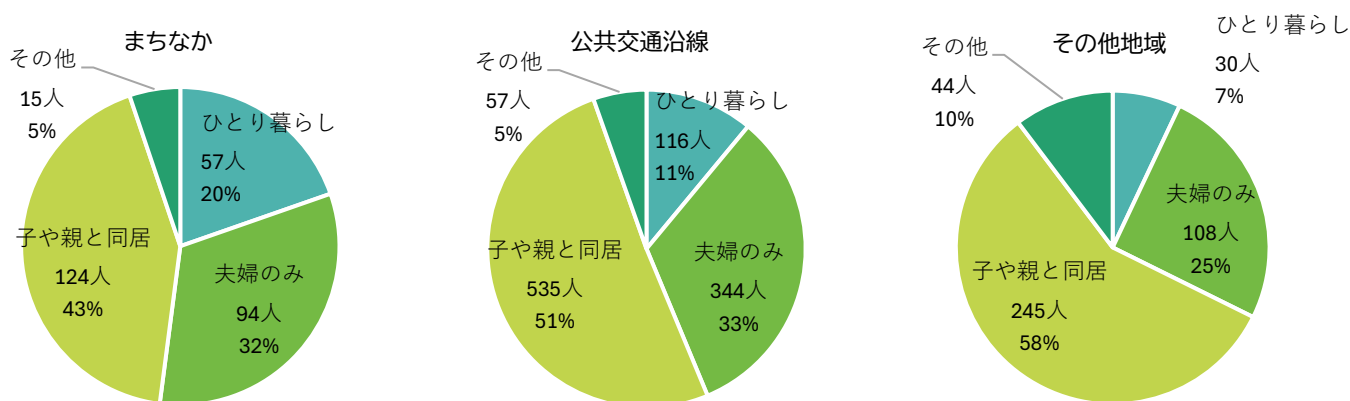
産まれてから同地区に居住している割合

産まれてから同地区に居住している割合はその他が、まちなかや公共交通沿線と比較し多いことが分かりました。このことから、転居あるいは移住する場合は、まちなかや公共交通沿線区域を選択する割合が高いことが推測されます。



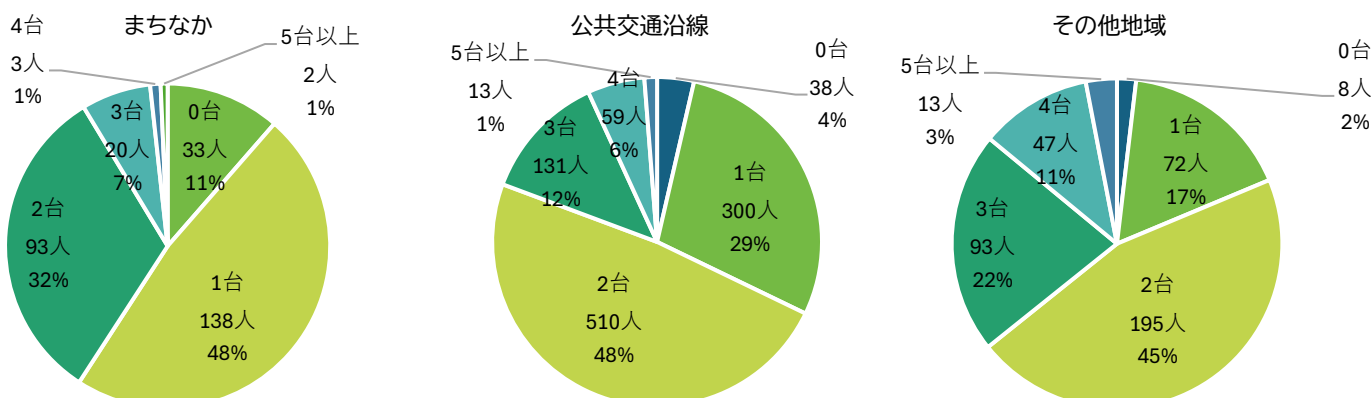
家族構成

ひとり暮らしの割合はまちなかが最も高く、生活施設や交通手段の豊富さなど、利便性の高さから選ばれている可能性があります。



自家用車所有台数

まちなかは所有台数が0台と1台の割合が高くなっています。一人暮らしが多いことの考慮は必要ですが、まちなかでは自家用車がない、或いは少ない台数でも生活が十分可能なことが推測されます。



その他、世帯収入や、教育歴、犬の飼育状況などについても地域ごとで有意差が見られました。

社会関連指標の分析結果詳細はこちらをご覧ください
https://tohokatsu.city.toyama.lg.jp/research_report_2024/





3.4 調査結果の可視化

■ 居住区域と健康・幸福度

本調査のアンケート回答者から得られた情報をまとめ、一目でチェックできるようにダッシュボード化しました。

富山市を「まちなか」「公共交通沿線」「その他」の3地域に分け、各地域の調査結果を富山市の地図上に重ね合わせています。

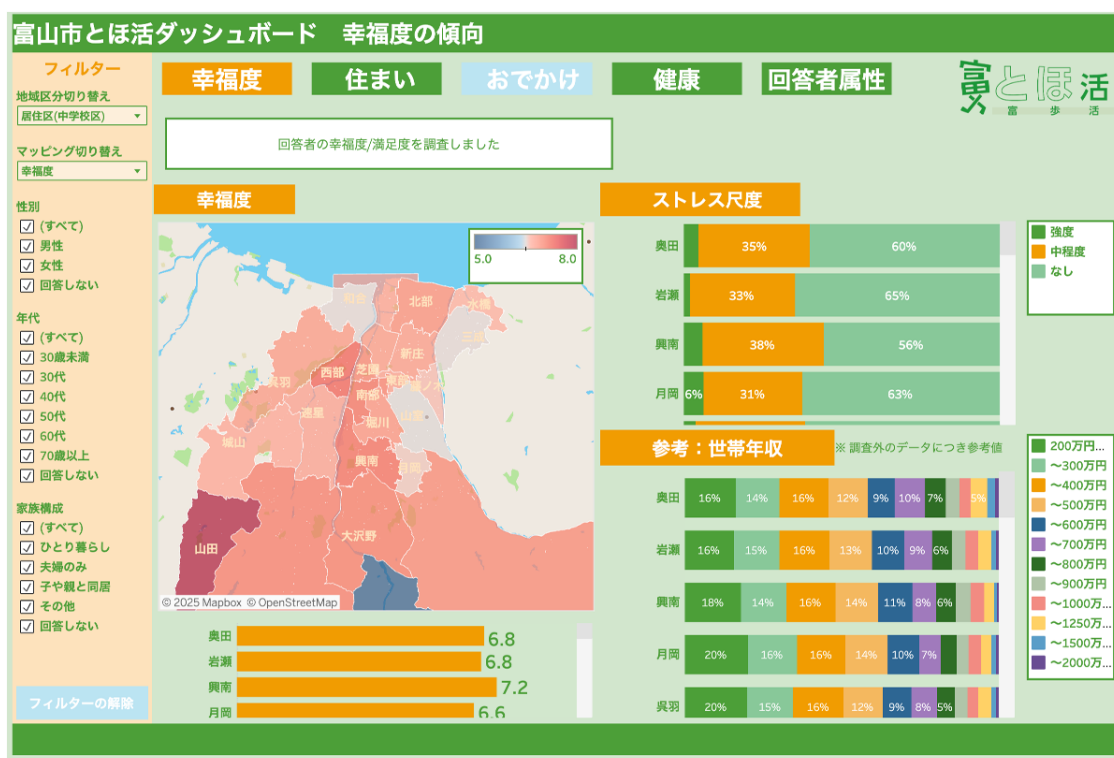
まちなか:都心地区(まちなか)

公共交通沿線:公共交通沿線居住推進地区

その他:上記以外の地区

さらに一般的な地域の区分として「中学校区」で調査結果を切り分け、昔ながらの地域の特性と住民の特性を把握しやすくしました。

本調査では富山市内の454郵便番号街区居住者が登録されたため、各居住推進地区のレイヤーと重なる郵便番号街区を選びました。都心地区(まちなか)と公共交通沿線居住推進地区の両方と重複する場合は、まちなか と判定しました。



このダッシュボードは、とほ活Webサイトにて公開しています。

富山市公式「とほ活」Webサイト 令和6年度調査結果ページ

https://tohokatsu.city.toyama.lg.jp/research_report_2024/



4. 調査・研究結果の活用



4.1 調査・研究結果の活用

■ 居住区域と健康・幸福度

- デジタル庁が開発したウェルビーイング指標の「幸福度」と「地域への満足」は、まちなか居住者群が最も高いことがわかりました。その一方で、精神的ストレス、睡眠時間、座位時間、スクリーンタイム、ヘルスリテラシーの値には3群間の差はなかったことから、本調査の参加者に関してはこの3地区に住むことによって起きるであろうストレスや睡眠の質等の格差が、「幸福度」と「地域への満足」に影響を及ぼしているのではなく、なんらかの別の要因によってこの差がもたらされていることが推察されました。
- 今後も本結果が普遍的なものであるか、とほ活を利用した追試、または別のアンケート調査なども行い多角的に検証していく必要があります。

■ おでかけ定期券の所有状況による医療費の経年変化

- おでかけ定期券を非所有のままの人の医療費の増加傾向が顕著でした。
- 定期券所有が続いている人の医療費は増加傾向にあるものの、非所有の人と比較すれば緩やかな増加であり、定期券利用での公共交通の利用は健康にも寄与している可能性が推察されます。

■ 「とほ活」アプリの利活用

- 地域経済へ寄与するアプリ活用方法の模索
調査結果より、イベントに合わせたアプリ利用の需要が確認されました。こうしたポイントを付与する仕組みは、大規模イベント開催時など、市外の方にも有効と考えられます。市内外の方々にアプリを周知、活用してもらうことで、回遊を楽しんでもらうとともに、提携するまちなか拠点の利用を促進する可能性もあると考えます。
- アプリの定期利用者への歩行動機づけ
利用者がアンインストールせずに活用し続ければ、継続的な平均歩数が記録できるため、歩数推移の分析から、月単位での歩行増減の予想も技術的には可能になります。
そうした予想値を予めみせることや、アプリ利用者間で競い、高めあうようなランキングの仕組みなどを設けるなど、今後の運用次第で、さらなる徒歩の動機づけが可能です。
- 「とほ活」アプリは、1,000名以上の比較的大規模な富山市民の意見を収集できるツールとして活用できることが証明され、さらなるユーザーの増加により市民の現状を把握し、今後の各種施策の検討を可能にする良質なモニタリングツールとなり得ます。

■ 新たな施策の推進

- 富山市は「歩くライフスタイル」を定着させる施策を推進しています。
- とほ活アプリ利用者は、富山市民の中でも、身体を動かすことや地域イベントへの参加に、関心が高い方々だとみられます。そうした方々の共通点や特徴から、市民の「ウォークスタイル」を見出し、ますます歩きたくなるような催しや空間づくりを提案することができます。
- 徒歩や公共交通を利用し まちなか への来訪を促す「とほ活」アプリの充実など、新しい施策の検討・推進に活用します。



本調査の調査結果については、今後とも民間事業者等に活用していただくなど、
更なる富山市の発展を目的として、とほ活Webサイトにて公開しています。



富山市公式「とほ活」Webサイト 調査報告ページ

<https://tohokatsu.city.toyama.lg.jp/research/>



制作：富山市

協力：富山大学・高齢化社会における交通と健康モニタリングシステムの研究開発コンソーシアム

キュアコード株式会社、共同印刷株式会社、中央大学理工学部都市環境学科 三浦 詩乃 准教授

お問い合わせ先：富山市まちづくり推進課 / TEL:076-443-2054

発行：令和7(2025)年3月